

あ　と　が　き

昭和40年に創刊された人文科学科紀要（人文地理学）も23年の月日を経て、ここに第10号を刊行する運びとなり、新たに谷内 達助教授を執筆者に迎えた。巻末に掲載された1～10号の総目録を省みて、木内信蔵、西川 治、河辺 宏の諸先生方をはじめ、本教室で助手を勤め日本の地理学界に巣立っていった、滝沢由美子、米田 巖、三上岳彦、荒井良雄、柴田匡平、内藤正典の諸氏の多岐にわたる業績をあらためて思い起し、今後の研究活動の進展を念願してやまない。

また、人文地理学教室は、この間に多数の優れた非常勤の先生方をお迎えした。教養学部システム・地誌両面にわたる幅広い授業内容は、これらの先生方の御努力に負うところが極めて大きい。この機会に厚く御礼申し上げるとともに、今後の御支援を切にお願いする次第である。特に市川健夫先生は、多くの学生を魅了した大矢雅彦先生の後を受けて、4年にわたり一般教育の人文地理学を講ぜられ、本年3月末をもって本学の定年を迎えられる。市川先生の活気に溢れた名講義に感銘を受け、地理学の道に進んだ学生も少なくない。本年4月からは、上坂修夫先生に御指導をお願いする予定である。

さて、人文地理学教室は、昭和61年4月より待望の新2号館に移転したが、佐藤哲夫・杉谷隆両助手の指導のよろしきを得て、このところ毎年8名の進学者を迎え、事務担当の桜井和代さんの誠実な人柄もあいまって、教室は活況を呈している。また、国際交流も盛んで外国からの来訪者も多く、この2年間に客員研究員のシムコ（スイス）、ペルティエ（フランス）の両氏を含め9ヶ国27名に上る。昭和62年3月には、日本・ポーランド経済地理学セミナーに参加された、ヴルーベル団長以下7名のポーランド地理学者をお招きし、学内において歓迎のレセプションが開かれた。この会には、国連大学副学長のフックス博士、前副学長のマンスハルト教授をはじめ、内外の地理学者、スラブ研究者、日本研究者が一堂に会し、多くの交流が生まれ盛会であった。

現在の本教室の職務分掌は、田辺 裕 教授が理学系大学院地理学専攻主任、谷内 達 助教授が教養学科人文地理学分科主任、山口が教養学部人文地理学教室主任となっている。

本紀要の刊行にあたり、多大の御支援をいただいた第3委員会、人文科学科、事務部に心より御礼申し上げます。

新装なった新2号館の研究室にて

昭和63年1月

山　口　岳　志